綾滝小説

ゆふづつより

眩（まばゆ）い星（ほし）

呉野　六ッ時

一、頭上に瞬く光

忍術学園二年い組・作法委員の綾部喜八郎はその日、非常に虫の居所が悪かった。眉間には見事な峡谷（きょうこく）が形成され、人気のない校庭を進む足取りはずんずんという表現がしっくり来るほどに荒々しい。意欲に欠けるきらいのある喜八郎にしては、随分と珍しい状況と言えた。

不機嫌の原因は、騒がしく厭（いと）わしい同級生にあった。

彼とは約一年前、忍術学園に入学したその日に初めて顔を合わせた。その時点で喜八郎は彼が自身とはすこぶる相性の悪い、率直に言えば嫌いな系統の人間だと確信した。だというのに何の因果か、長屋では同室と来た！ 当然すぐに部屋替えの要望を、性格や価値観の相違故に精神的負荷が大きいという明確かつ重大な理由も添えて申し出た。しかし担任の教師には取り合って貰えず、垂れ流され続ける自画自賛に閉口しながら一年耐える羽目になったのだった。それでも一年次はどうにか修了できたが、当然喜八郎はこの状況に納得などしていなかった。故にこの一年の苦痛を切々と語った上で、改めて部屋替えの必要性を訴えてから春休みに入ったのである。

これでようやく健やかに学園生活が送れる――そんなささやかな期待を胸に新学期を迎えた。だが登校した喜八郎を待っていたのは、去年とまったく同じ並びで長屋の廊下に下げられた二つの名札だった。

喜八郎は膝から崩れ落ちそうになった。だがまあ、去年一年耐えたのだ。あと一年くらいはどうにかやり過ごせるだろう。その間に今度こそ同室を免れる方法を検討しよう――喜ばしくない現実を、そんな風にできるだけ前向きに受け入れようとした。

ところが、ある程度妥当だったはずのその見込みも、早々に打ち砕かれてしまうのだった。なんと喜八郎の呪わしき同室は、去年に輪をかけたやかましさへと進化を遂げたのである！原因は彼の口上を簡単には無碍（むげ）にできない存在の登場にあった。体育委員会に一年生が入ったため、初めての直属の後輩を得たのである。喜八郎の所属する作法委員会にも新入生は加わったが、それで喜八郎の何かが変わることはなく、当然ながら彼のように迷惑行為を働くこともない。つまりすべての問題が彼自身に由来していることは明々白々である。

百歩譲って、うるさいのはまだ許容できた。ぐだぐだと垂れ流し始めたら自ら距離を取ればそれで済むからだ。だが何が面白いのか、彼は自ら進んで、しつこいくらいに喜八郎に絡んで来るのである。しかも彼の高過ぎる自尊心がそうさせるのか、避けても逃げてもあからさまに疎んじてさえ彼が傷つくことはないらしい。故に喜八郎がどう足掻こうとも事態は少しも改善されず、心労（ストレス）は蓄積される一方だった。

そんな状況に遂に耐えかねた喜八郎は、これ以上絡まれたくない一心で本日、愛用の踏鋤を手に長屋を飛び出したのだった。

溜まりに溜まった心労（ストレス）は穴掘りで発散するに限る。だが長屋や校舎の周辺、すなわち日常

的に行き来のある範囲では自由に掘ることができなかった。別に禁止されてはいないのだが、二つ歳上に穴という穴に落ちまくる先輩とその保護者がいるため、無用な批判と干渉を受けるからである。そんな環境下では発散するどころか余計な心労（ストレス）を抱えるだけである。

故に喜八郎は気持ちよく穴を掘れる場所を求め、敷地内でも人気のない端の方へと向かっているのだった。生活圏から離れれば厄介な同室に絡まれる可能性も下がり一石二鳥である。

生い茂る野草を掻き分けずんずんと進んでいた喜八郎は、ふとその荒々しい歩みを止めた。担いでいた踏鋤を下ろし、地面に先端を突き立てる。軽く表土を剥げば、水気を帯びた黒っぽい土が顔を覗（のぞ）かせた。見た目と触感から、それが砂礫（されき）と粘土の比率的に穴掘りに適した土であることが分かる。

自身の鑑定眼の確かさに満足した喜八郎は、そのまま本腰を入れて掘削を開始した。

穴を掘るのはとてもいい。適度に締まった土を掻き分けるざくざくという音だけが耳に届き、掘り進めるほどに濃くなる泥臭さに全身が包まれる。それは幼い頃から慣れ親しんだ、喜八郎にとって心落ち着く環境だ。

喜八郎は幼い頃から土が好きだった。匂いや感触といった土自体の特徴もさることながら、一人土遊びに興じている際の孤独感を好ましいと思っている。故に土いじりの延長線上にある落とし穴の作成は、天職ならぬ天技と言えた。

元々忍術学園には、家長の命で入学したに過ぎなかった。兄姉とは違い自分だけが全寮制の学園に入れられた事実を認識してはいたが、喜八郎にとってはどうでもいいことだった。自身が世間一般から浮いている自覚はあって、それはどこへ行っても変わらないし変えるつもりもない。故に両親が己を持て余したということなら仕方ない、程度にしか思わなかったのだ。

だが人里離れた学園は、それまで喜八郎を取り巻いていたのとはまったく異なる世界だった。なんせどれほど穴掘りに興じても、嫌な顔をする者も奇異な目を向ける者もほとんどいないのだ。むしろ掘った穴が評価され、その技術を褒められることさえあった。穴を掘ることを忌避されないという点だけで、忍術学園は喜八郎にとって最良の環境と言えた。

黙々と土を掘り返しながら、そんなことを考えるでもなく考える。だがいくら掘り続けても、いつものように穴掘り自体に没頭するには至れなかった。当然心に巣くった苛立ちもなかなか治まってはくれない。

大好きな穴掘りにのめり込めない自分に、さらに不満が膨らむ。故に喜八郎の思考は自然と、すべての発端であり苛立ちの原因たる同級生のことに移っていった。

「二年生の中で、教科の成績が一番なら実技の成績も一番！　忍術学園のすたぁ、平滝夜叉丸とはわたしのことだッ！」

これが喜八郎をうんざりさせている厄介な同室の、無駄に長ったらしい自己紹介の一例である。一例と称したのは、時と場合により微妙に変わるが故だ。本当に大した差はないのだが、当人にうるさく食い下がられる危険性回避のためこういった表現を採用している。厄介な同室こと滝夜叉丸は、このような思い上がりに満ち満ちた口上を恥ずかしげもなく、頼んでもいないのに繰り返し垂れ流すのだ。

教科の成績が一番なのは、まあ事実なので目をつむろう。試験の点数の話でしかなく、別に誇示するものでもないとは思うが。

実技の成績が一番なのも、まあまあ嘘でもないので聞き流してやってもいい。先生方曰く、時の運も実力の内であるらしいので。

だが紹介した口上よりも頻繁に、それこそ喜八郎の耳にタコができるほど彼が口にしている『美しい』という自己評価については容認しかねる。と言うか意味が分からない、と喜八郎は思っていた。

無論喜八郎も一般的な美醜の評価基準は備えている。咲き誇る花々に感じ入る機微も美しい景色に心震わせる感受性も持ち合わせてはいないが、それらが美しいことは理解る。

また『美しい人』の存在も認めていた。作法委員会の先輩方、特に二つ上の立花先輩は歳が

近いこともあってその筆頭と認識している。ただし喜八郎の認める美しさは、先輩方の動作が洗練されていて無駄がなく静かであるが故の、機能美に近いものだ。滝夜叉丸の言う美しさはそうではない。そのまま外見の美醜の話なのだ。

確かに、世間の基準に照らせば彼の容貌は整っている方なのだろう。だが忍びとは基本的に闇や世間に紛れ隠密（おんみつ）に事を成すものだ。外見が直接影響するとすれば色を用いた忍術が思い浮かぶが、そもそも色は〈忍者の三禁〉に数えられ様々な危険性を孕むため、多用すべきものではないと教わった。他に、目を惹く美しさ故に予期せぬ注目を集めてしまい忍務に差し障るなど、自身にとって不利に働く懸念もある。以上を踏まえると美醜など、こと忍者においてはほとんど価値のない評価基準だと思うのだ。

最も理解できないのは、彼が派手さを好み目立ちたがってばかりいる点だ。陰陽によらず、姿はおろか名さえ残さぬのが忍者だ。派手に立ち回り世間一般に顔や名を馳せるなど言語道断、忍者を志す者にあるまじきことである。

つまり何が言いたいかと言うと、滝夜叉丸の誇る美しさとやらは喜八郎の理解するそれとは対極にあり、彼が自称する優秀さとも矛盾するため理解に苦しむ、ということである。

大体にして、すたぁとは人気者を指す言葉だそうだが、彼はやかましい口上で喜八郎を始め周りの人々に迷惑をかけてばかりいるのだ。人に好かれるはずもなく、彼がすたぁだった試しなどない。また過剰な自信は〈忍者の三病〉の一つ『敵を侮（あなど）る』思想の土壌になり得るため、先生からも既に注意を受けていたはずだ。喜八郎に言わせれば「未熟も未熟、自惚れも大概に

しろ！」でしかなく、三U（うるさい、鬱陶（うっとう）しい、疎（うと）ましい）が適切だと思っている。

「痛、っ」

その時突然、喜八郎の両手に痛みが走った。思わず声が漏らし踏鋤を取り落とす。

苛立ちのあまり余計な力を込めてしまっていたのか、踏鋤を手放してなお手のひらはじんじん痛んだ。皮が剥けているかもしれないと思い、両手を広げて視線を落とす。そこでようやく喜八郎は、自身の手元さえよく見えないほど周囲が薄暗くなって来ていることに気がついた。

体感ではそれほど経ってはいなかったのだが、同室批判に夢中になり過ぎていたのだろうか。だが日が暮れたのなら穴掘りを中断して戻らねばなるまい。幸い本日は当番ではないが、食事の時間に間に合わなければ夕食を食いっぱぐれてしまう。

故に慌てて顔を上げた喜八郎はしかし、広がる光景に瞠目しすべての動きを止めた。

遥か頭上に、丸く切り取られた空がある。それはかつてないほど小さく、覗（のぞ）く青はやけに薄白く感じられた。一応青空である以上、日暮れはまだ遠いのだろう。つまりこの薄暗さは、穴がひたすらに狭く深いためにもたらされているのだ。

こんなに深く掘ったのは初めてだ。空の遠さからその深さを実感した喜八郎は、そこでようやく自身の陥っている状況を認識し青ざめた。――穴の外へ出る手段がないのである。

馬鹿の一つ覚えのようにただ下に向けて掘りすぎた。この深さでは、鉤縄（かぎなわ）を投げ上げても穴の外に届かないだろう。苦無を用いて壁を直接登る方法も考えられるが、踏鋤さえ握れない両手には己の全体重を支える役割は荷が勝ち過ぎる。歩いて出られるよう穴の壁を崩し傾斜を作ろうにも、この深さではかなりの距離が必要になる。手の状態を鑑みるとこれも現実的ではない。妥当な打開策が何一つ浮かばず、喜八郎は呆然とするしかなかった。

「おーい」

とりあえずできることとして、穴の外に向けて呼びかけてみる。しかし自身の声が穴の中に反響するだけで誰も応えない。

「おーーい。だーれかーーぁ、いませんかぁーーーー」

少しの間を置いて今一度呼びかけた。先刻より声を張り言葉尻を少し長く伸ばしてみたが、やはり応える者はない。ここは学園の敷地の端っこで、喜八郎は人気がないことを理由に足を運んだのだ。それは自然当然の結果と言えた。

反響が止むと、穴の中に静寂が満ちる。呼びかけの前後で状況に変化はなく、土の下が地上よりずっと静かなことも知っている。むしろその静けさを気に入っていた。だが己が孤立無援でなす術がない現実に、喜八郎は思わず膝を抱えてその場にしゃがみ込んだ。

（――このまま、誰にも見つけて貰えなかったらどうしよう……）

腕に力を込めて自身をぎゅうと抱きしめ、浮かんだ不安を振り払うように頭を振る。

土が好きな喜八郎にとって穴の中は、雑音がなく誰に侵されることもない安心できる場所のはずだった。しかし今、慣れ親しんでいたはずの孤独にじわじわと蝕まれていくような感覚に苛まれている。己が手の状態さえよく見えない薄暗さが、静寂の輪郭を浮き彫りにするようだ。長年心地よさを感じてきた世界に、喜八郎は今初めて確かな恐怖を抱いていた。

だが喜八郎は、恐怖に泣き喚(わめ)いて助けを求めるような可愛げのある子どもではなかった。故に抱えた膝に顔を埋め、去来する悪い想像やにじり寄る恐怖を必死に退けながら時が過ぎるのを待った。最悪でも日が経てば捜索されるはずだから大丈夫だと、自身に言い聞かせて。

そのままどのくらいの時間が経っただろうか。不安と戦う喜八郎の頭の上に、不意に細かな砂礫(されき)がぱらぱらと落ちて来た。

「――喜八郎！」

直後、永遠にも思えた静寂を引き裂いて、己が名を呼ぶ声が穴の中に凛と響いた。

ハッとして顔を上げる。見れば、ここ一年以上に渡って不愉快さだけをもたらし続けていた端整な顔が、薄青色の丸い空を背負って穴の縁から覗(のぞ)いていた。

「こんなところにいたのか！ ずいぶん探したんだぞ、返事くらいしろ！」

その顔が第一声に放ったのは叱責だった。呼び声を聞いた覚えはなかったが、驚きに言葉を失っていた喜八郎はただ彼を見上げることしかできない。だが返事がないことに、無駄に均整の取れた顔の持ち主こと滝夜叉丸が不満を示すことはなかった。真顔のまま、検分するように穴全体に視線を巡らせる。結果思うところがあったのか、訝(いぶか)しげに眉を寄せた。

「ん？ この穴、……やけに深くないか？」

「……掘り過ぎちゃって、」

端的な問いに、後ろめたさから尻切れトンボになりつつも正直に答える。直後、滝夜叉丸が眉間のしわを深くしたのを見て、喜八郎は情けない思いで顔をしかめて項垂れた。同時に両手をつい握り締めてしまい、走った激痛に身体が反射的に竦む。慌てて手から力を抜くと痛みはすぐに和らいだ。痛みの余韻の残る両腕をだらりと垂らしたまま、唇を噛み締める。これから浴びせられるだろう正論や叱責を甘んじて受け止めるべく、地面を睨めつけ身構えた。

しかし。

「お前登器は、……この深さでは無理か」

続いた滝夜叉丸の言葉に、喜八郎は思わず瞬いた。当然叱られるか呆れられるものと思って

いたが、彼の思考は既に事実の把握と解決策の模索へ移っているらしい。
（……馬鹿にしたりもしないんだ。意外、――……いや、そうでもないか）
脳裡に浮かんだ新たな驚きを、しかし喜八郎は即座に否定した。滝夜叉丸が基本的に他人を貶(おとし)める言動をしない人であることにすぐ思い至ったからだ。度を超した自惚(うぬぼ)れの数々に日々悩まされていたため認識の外となっていたが、それらを除いた彼の普段の言動を振り返ってみればそれが事実だった。……三木ヱ門という例外はいるが。
「自力で登れるか？」
「……ちょっと無理かな」
冷静で現実的な問いに、実態に即して素直に答える。すると滝夜叉丸はあごに手を添え視線を彷徨(さまよ)わせ始めた。その怜悧な顔を、喜八郎は淡い感嘆を胸にぼんやりと見上げる。
「少し待て」
思案の末に、滝夜叉丸は短い指示を言い残すなり顔を引っ込めた。途端、喜八郎はなんとも言い難い心許なさに囚われる。どうやら本人同様主張が激しいその顔に、どこか安堵を覚えていたらしい。非常に不本意ながら見慣れた顔だったからだろう。喜八郎は自身の妙な心理状態の変化に、やや暴論である認識はありつつもそう結論づけた。
待てと言うからには戻って来るつもりなのだろう。だが喜八郎は不安を拭(ぬぐ)い切れずにいた。
これまで喜八郎は滝夜叉丸をあらさまに邪険にしてきていた。それは三Uを忌憚(きたん)なく発揮

し続けている彼自身に原因があるのだが、彼が抱く感情は事実の因果に必ずしも影響されない。何一つ響かないかのような態度の裏で不満を募らせていて、この機会に意趣返しをしないとは言い切れないのだ。根拠はないが、そんな不安が何度否定しても頭をもたげて来るのだった。そもそもこの状況を彼はどう打開するつもりでいるのか、という疑問もある。いずれにせよ、元より為す術のなかった身にはできることなど何もないのだが。

喜八郎は再び穴の底に座り込むと、眼前の闇に目を凝らした。存在が分かる程度にぼんやり映る己が手を見つめ、繰り返し襲いくる不安と戦いながら滝夜叉丸の戻りを待つ。

期待を抱いたからだろうか、ただ彼を待つ時間は恐ろしいほど永く感じられた。自身を取り巻く闇も刻一刻と濃さを増していく。やがて悪くなる視界に耐え切れなくなった喜八郎は、再び膝に顔を埋めて硬く目を閉じた。眼裏は常に一様の闇であり、故にこそ同じ闇でも恐怖を覚えることはない。そう考えたが故だ。

足下から這い寄ってくるような不安から身を守るように縮こまり、唇を引き結んで耐える。

不安に満ちた永い静寂に身を浸していた喜八郎の耳に、ふと微かな音が届いた。ぱらぱらと降る砂の感覚に急いで空を仰げば、頭上の円形の世界が黄色味を帯び始めているのが分かる。そしてその端から、あの憎たらしくも安心する端整な顔が再びこちらを覗いていた。

「待たせたな。これでどうだ？」

滝夜叉丸の言葉と、それを追うようにカラカラと軽やかな音が降って来る。即立ち上がって確認すると、縄と竹が格子状に組まれた細長い道具が壁沿いに垂れ下がっていた。既に何度か授業で練習した、縄梯子（なわばしご）という忍具だ。

だが見知った忍具である目の前のそれに、喜八郎は微かな違和感を覚えた。どうやら普段のものより作りが大きいらしい。深すぎる穴に対し、用意された大きめの縄梯子——恐らく自身の縄梯子では短いと判断した滝夜叉丸が、用具倉庫から上級生用の備品を借りてきたのだろう。喜八郎は推測された彼の観察眼と機転に淡く感心した。

一段目に足をかけてよじ登る。だが元よりバランスを取るのが難しい上に身の丈に合わない大きさのためか、縄梯子は体重を預けただけでひどく揺れた。喜八郎は梯子の上で揺れが落ち着くのを待ち、万全の体勢が整ってから次の段へと足をかけていく。

一動作ごとに身体がぐらつき、崩れた姿勢を正す度に手のひらに痛みが走る。喜八郎は苦痛に歯を食いしばって耐えながら、さらにもう一段上に足をかけた。

だがその瞬間、喜八郎の身体が一際大きく傾（かし）いだ。姿勢を修正する暇もないまま、縄梯子が生き物のように激しく身をくねらせる。天地がひっくり返り、身体が宙に浮いた。

「——っい、ったぁ……!!」

気がついた時には、喜八郎は背中を地面に打ち付け悲鳴をあげていた。

だが痛みを堪(こら)えて即飛び起きると、反動で揺れている縄梯子を両手で捕まえ押さえつけた。揺れが落ち着くまで待ってから、今一度最下段に足をかける。

地上を目指し、再び慎重に登っていく。だが喜八郎はまたしても、先ほどよりも下の段階で大きくバランスを崩した。落下を免れるべく必死にしがみついたが、縄が食い込み走った激痛に反射的に手を離してしまう。当然ながら、喜八郎の身体は再び宙に投げ出された。

「〜〜〜っ、ぅ……ッ！」

衝撃に息が詰まる。喜八郎は顔をしかめつつも悲鳴を無理やり呑み込んで、痛みをやり過ごすべくその場で背を丸めた。頭上の縄梯子が壁面にぶつかり、ぱらぱらと砂礫(されき)を降らせる。

だが助けて貰っている立場の喜八郎にはゆっくり休んでいる暇などない。ぶるぶる頭を振るって砂を払い落とすと不屈の精神で立ち上がり、今なお揺れている縄梯子に組み付いていく。

「ぁ、――ぐ……ッ」

転げ落ちては、駆り立てられるように縄梯子に挑む。だが上手くいかない現実が焦りを生み、焦りは当然の帰結として失敗を呼んだ。喜八郎が上れる段は回を追うごとに減り、落ちてから起き上がるまでの時間も徐(おち)々に延びていく。

深く薄暗い穴の底に、呻(うめ)き声と気まずい沈黙が代わる代わる訪れる。緩やかな悪化はさらなる焦りに繋がって、今や喜八郎は悪循環に陥(おちい)ってしまっていた。

「ぅわ、ぁっ！――ッぅ、〜〜〜……っ」

何度目の墜落だったか、受け身に失敗した喜八郎は肘を強かに打ち付けた。腕全体が痺れるような激痛に悶絶し起き上がれずにいる喜八郎の頭の上で、縄梯子がぶらぶらと揺れている。

滝夜叉丸は、喜八郎が縄梯子に悪戦苦闘し始めてから一言も発していない。彼の普段が普段なだけに長い沈黙に居たたまれなさが募り、得も言われぬ不安がむくむくと膨らんでいく。

「――……ごめん。今、登るから……、もうちょっと、待って……」

疲弊（ひへい）した身体を起こしながら、言い訳のような言葉を吐（は）く。闇が迫り孤独と恐怖を湛（たた）えるこの穴に、独り取り残されるのはもう嫌だった。

だが喜八郎が言い終えるより早く、軽やかな音が鼓膜を揺らした。落ちてくる砂粒を感じてハッと仰ぎ見れば、引き上げられていく縄梯子の末端が視界に映る。その絶望的な光景を目の当たりにして、喜八郎の心の臓は痛みを覚えるほどに縮み上がった。

「――つな、ッ待って！　待ってよ……ッ！」

取り乱して立ち上がった喜八郎の喉から、悲鳴に似た叫びが迸（ほとばし）った。恐慌し一心不乱に両腕を伸ばすが時既に遅く、掠めることすら叶わない。

無情にも縄梯子はどんどん遠ざかっていく。喜八郎は目の前が暗くなる思いで、それをただ茫然（ぼうぜん）と見送ることしかできない。

「今のままでは、何度やっても同じだろう」

縄梯子の代わりとでも言うように、冷静な言葉が降って来た。呆れ混じりに紡がれたそれが、失意に暮れる喜八郎にはひどく残酷に聞こえる。

だがその時、茫然と見上げる喜八郎の目が、こちらを見下ろしている滝夜叉丸の顔を捉えた。そしてその端整な顔、切れ長の目に蔑みや不満、嘲(あざけ)りといったの負の感情が欠片も浮かんでいないことに気がつく。

瞬間、絶望に潰れてしまいそうになっていた喜八郎の心が、幻術にでもかけられたかのように唐突に凪いだ。

「わたしを何だと思ってるんだ。捨て置くわけなかろうが、少し落ち着けアホハチロー」

先刻と同様の、ため息混じりの言の葉が舞い降りて来る。だが呆れを滲ませた声音は喜八郎の中にひどく穏やかに響いた。

（――滝夜叉丸って、こんなに柔らかい声を出す人だったかな……）

やや拗(す)ねたようにこちらを見下ろしている同室の顔を、驚き以(もっ)て見つめる。喜八郎は既に普段の落ち着きを取り戻しつつあった。

「……また少し外すぞ。ちゃんと戻って来るから、手を休めて大人しくしてろ。分かったな？」
暫し黙ってこちらを見ていた滝夜叉丸が、眉間のしわはそのままに再び指示を下してくる。
喜八郎はその瞳をじっと見つめて、ただ小さくうなずいた。
馴染みの深い端整な顔は真顔でうなずき返した後、再び切り取られた世界から姿を消した。
深い深い穴の中に、再び独り取り残される。当然ながら闇は今までで一番濃くなっていた。
自身を取り巻く状況は悪化している。だが不思議なことに喜八郎は今、不安も恐怖も感じていなかった。故に特別永いと感じることもないまま、滝夜叉丸が戻ってくるに至った。

再び顔を覗かせた滝夜叉丸は、今一度縄梯子を穴の中に下ろした。
「いいか、足をかけたら梯子にしっかりしがみつけ。登らなくていいから、手を離すなよ」
追って妙な指示がなされた。首を傾げるも、他にできることのない喜八郎は従うだけである。言われたとおり一番下の横縄に足をかけてよじ登ると、そのまま梯子にしがみついた。
途端、視点が突如下にずれた。瞬く喜八郎の目の前で土壁が少しずつ勝手に下がっていく。足下を窺（うかが）うと、自身のいる場所が徐々に高くなっていっているのが分かった。
どうやら喜八郎を乗せた縄梯子を引き上げていく作戦であるらしい。なるほど、登れずとも縄梯子ごと引き上げればいずれ地上に出られるだろう。手に負担が掛かる点に変わりはないが、握ったり離したりを何度も繰り返すよりは遙かに楽である。

穴の縁に垂らした梯子を引き上げる方法故に、時折壁に身体がぶつかるのは避けられない。だが喜八郎は落ちないことにだけ専念すればいいのだ。振り落とされるのはもちろん、痛みに手を離してしまうことがないよう必死に梯子に食らいつく。

地上が近づくにつれ、丸く切り取られた空が徐々に大きくなる。それは既に薄黄色を過ぎて橙色に染まりつつあった。故に劇的にこそ変わらないが、視界も少しずつ明るくなっていく。それに呼応するように喜八郎の心にも光が差し込んでくる。穴の縁まであと少しだ。

――このまま穴の外まで引っ張り出されるのを待つべきだろうか？　だが穴の縁を通過する時の衝撃に、痛みを訴え続けている喜八郎の両手は果たして耐えられるだろうか。失敗したら最初からやり直して貰わねばならなくなる。余計な面倒をかけるのは絶対に避けたかった。

新たに生じた問題にどう対処すべきか、判断に迷う。ちょうどその時、喜八郎の視線の先、穴の縁に目鼻立ちの整った顔が覗いた。

「手を伸ばせ！」

そう呼び掛けながらこちらに上体を乗り出し手を差し出してくる。橙色の空を背負ったその姿が、喜八郎にはひどく眩しく映った。――まるで空に輝く星のように。

その輝きに誘われるように、梯子から手を離し彼へと伸ばす。指先同士が触れ合う直前で、彼の腕がぐんと伸びて喜八郎の手首を掴んだ。喜八郎野の身体は、その手の温かさに感嘆する

暇もなく一息に、力強く引き上げられる。

気がつけば、喜八郎は放り出されるようにして地上に身を転がしていた。無事完遂した安堵で身体から力が抜け、転がった体勢のままゼイゼイと荒い息を繰り返す。

そんな喜八郎の上に、不意に人の形をした影が掛かった。

「無事地上に戻れてよかったな、喜八郎」

振ってきたのは滝夜叉丸のそれとは異なる、低く柔らかで落ち着いた声音だった。喜八郎は想定外の事態に驚き、弾かれたように顔を上げる。そこに居たのは、紫（ゆかり）の装束を纏った肩に長く艶やかな黒髪を優雅に流した白皙（はくせき）の美青年だった。

「ッ!? 立花先輩!?」

喜八郎は、突然登場した直属の先輩の姿に跳ね起きた。見上げた先輩は夕日を背に腕を組み、涼やかな空気を纏って佇んでいる。影になった怜悧な顔には穏やかな笑みが湛えられていた。

考えてみれば、体格の変わらない滝夜叉丸が一人で喜八郎を穴から引き上げるなど不可能だ。先輩の助力があって脱出が叶ったことを理解して、喜八郎の胸に感謝の念が込み上げてくる。

「助けていただいてありがとうございました」

素直に頭を下げて礼を言う。だが先輩はただ面白そうに薄く笑んで小首を傾げた。

「私は後輩の求めに応じて力を貸しただけだ。礼を言う相手が違うのではないか？」

そう言いながら、先輩がおもむろにあごをしゃくって見せる。その視線を追うと、ほど近くの木の根元に、くくりつけられた縄を外している滝夜叉丸の姿があった。

その様子を遠巻きに眺めていると、不意に頭に触感を覚えた。見れば喜八郎の頭の上に手が乗せられている。その手の主である先輩は、未だ愉快そうな微笑を湛えていた。明らかに面白がられている。覗き込んでくる顔を上目遣いに睨めつけるが、先輩はただぽんぽんと頭を叩いてくるだけだった。何度か叩くと喜八郎から離れ、滝夜叉丸の方へと足を向ける。

ちょうど縄を解き終えた滝夜叉丸に声をかけ、二言三言交わす。ぺこぺこと頭を下げる彼を宥めるような身振りをした先輩は、喜八郎にしたように滝夜叉丸の頭にも優しく手を乗せた。そのまま驚く滝夜叉丸に微笑みかけると、こちらを一瞥もすることなく颯爽と去って行った。

……先輩の言いたいことは分かっている。喜八郎は、頭に手を添えたまま先輩の背中を見送っている滝夜叉丸にそろりと歩み寄った。見開かれた彼の瞳には憧憬が宿っている。

「――滝夜叉丸。その、……助けてくれて、ありがとう」

少々の気まずさを感じながらも素直に礼を言う。呼び慣れていない彼の名が舌に馴染まず、なんだか居心地の悪さを覚えた。

実はこの一年と少しの間、喜八郎は一度として彼を下の名前で呼んでいなかった。出逢ってすぐに喜八郎を同意も得ずに下の名で呼び始めた馴れ馴れしい態度が不愉快だったため、多少不便があっても意識的に避け続けていたのだ。

どの部分に驚いたものか、滝夜叉丸はあからさまに瞠目した。だがすぐに得意げに笑いあごを上げる。表情はそのままに胸を張り、大変見慣れた尊大極まりない姿勢を作った。

「っ、ふふーん！ ようやくこのすたぁ平滝夜叉丸の偉大さが分かったか！ この程度ッ、このわたしには朝飯前だッッ！ わーっはっはっはっは!!」

ふんぞり返ったまま、相変わらず不遜で無駄に長ったらしい発言の末、やかましく大笑する。喜八郎は見るからに天狗になっている彼にげんなりした。少し態度を改めたらこれである。

調子に乗せてしまったかと自身の対応を後悔しかけて、しかし喜八郎はふと彼の耳殻が赤くなっているのに気がついた。彼はどことなく落ち着かない様子で得意げな顔を微妙に引き攣らせ、しかし全身から嬉しげな空気を醸し出している。どうやら、肯定的かつ好意的な喜八郎の態度に戸惑っているらしい。意外な滝夜叉丸の一面に、喜八郎は彼にも可愛いところがあったのかと思わず感心した。だがその感想を口にはしない。

「はいはい」

「いや待て扱いが雑過ぎではないか!? 偉大なわたしが話をしてるんだ、りすぺくとを持って耳を傾けるべきだろう!! 分かるか喜八郎!? りすぺくとだ!!」

意図的に適当極まりない相槌でいなすと、滝夜叉丸が目を剥いて噛みついて来た。だが文句を言いながら、彼はおもむろに喜八郎の背中から踏鋤を奪い取った——まるで当然のように。

どうやら手を痛めた喜八郎に代わって持ち帰ってくれるようだ。一方的に自惚れを垂れ流している普段の押しつけがましさが嘘のような、いたく柔らかな配慮である。喜八郎はなんとも言い難いこそばゆさを感じつつ滝夜叉丸の隣に並び立った。

「分かんないし聞こえなーい」

共に長屋の方向へと歩き始めながら、彼の要求を否定する言葉を吐く。事実りすぺくとなる単語はまったく知らないし、彼の長ったらしく中身のない話も最初から聞く気はない。

「にゃ、にゃにぃい!? こんなにも美しく素晴らしい人間が、人類の宝がすぐ傍に居るというのに、なんたることだ！ だいたい喜八郎はいつも……」

返答が期待外れだったのだろう滝夜叉丸が不満げな声をあげた。喜八郎は傍らでぐだぐだと垂れ流され始めた小言を聞き流しながら歩を進める。だがその心は穴掘りに出る前とは違い、いたく穏やかなままだった。

煩わしいところが変わったわけではない。

だが眩しいほどの輝きを、好ましさを感じる面があることも、今の喜八郎は理解している。

穴底から見上げていた輝きは今、喜八郎のすぐ傍らにある。そしてこれから先も、暗い面と輝く面の両方を喜八郎に見せつけてくるのだろう。——ちかちか瞬く星のように。

そんな予感に、喜八郎は薄らと笑みを浮かべた。

二、眩い光を放つもの

「ふぅ。……こんなものかな」

額に滲んだ汗を手の甲で雑に拭いつつ、喜八郎はすぐ足元を見下ろして独りごちた。普通の地面にしか見えないだろうが、実はそこに仕上げたばかりの落とし穴・トシちゃん二四八号が存在している。顔を近づけてよく見なければ作った本人でさえ正確な位置が分からないほどの完成度だ。故に喜八郎はその場に身を屈めて本物の地面との境目を今一度確認し、目についた僅かな綻びを修正した。そして非の打ち所のない出来栄えを改め、眺めて満足の息をついた。

忍術学園での日々の中で、喜八郎は自主的に多種多様な罠を習得してきた。己が興味故ではあったが、今では四年生にして天才トラパーと称されるほど高い技術を誇っている。天才などという大仰な称号には、さすがの喜八郎もこそばゆさを覚えてはいた。だが罠一筋に積み重ねて来た努力を認められていると思えば素直に誇らしく、また名前負けではない自負もあった。

そんな喜八郎が最も面白く思い得意とする罠はやはり落とし穴だった。四年生になってなお喜八郎の土好きは変わらなかった。故に暇さえあれば穴を掘り、せっかくだからと落とし穴にする。

このトシちゃん二四八号も、そんな落とし穴の一つだ。喜八郎は出来のいい落とし穴に名前

をつけている。尤も、トシちゃんが実際二四七あったのかは定かでないし、トシちゃんたちを含む過去作たちの大半は既に跡形もないのだが。罠は作動してナンボだ。それが長く残存しているということは、誰も掛からない精度だと大言しているに等しく恥ずかしいことである。

名が付いているとおり今作も、自画自賛ながらよくできている。だがこの傑作には一つだけ、致命的な欠点があった。所在地が学園の敷地の外、しかも裏裏山から延びる街道を逸れた獣道の近傍と離れた場所であることだ。

トラパーは罠のそのものの出来よりもその成果、すなわち標的を上手く仕留めることに価値を見出す。つまり傑作であればあるほど、誰かが罠にかかるのが待ち遠しいのだ。だが学園の敷地から離れるほどに期待値は著しく下がる。『誰か』とは言ったが、罠に掛かりさえすれば本当に誰でもいいわけではないからだ。

農民や商人、職人などはそもそも対象外だ。敵意も武力も持たぬ者を罠にかけるなど正心にもとる行為である。故に街道のような人通りの多い場所に罠を設置してはならない。だが山中の獣道では、掛かっても猪辺りが関の山だろう。それがどれだけ大物で、貴重な獣肉が食堂のおばちゃんや学園の皆に喜ばれようと、鳥獣は喜八郎を満足させる獲物にはなり得ない。

ならば誰がいいのかと言えば、当然忍者である。罠を扱うのが忍者なら、それらを回避する技術を持つのもまた忍者だ。故に責められるべきは罠を仕掛けた者ではなく、罠にかかった者の技量のなさと言える。そしてその論法はすべての忍者、すなわち忍たまにも当てはまるのだ。

だが喜八郎はただの穴掘り小僧ではない。天才トラパーたる者、経験に乏しい下級生やヘボ忍者などで満足はしないのだ。狩猟や釣りで大物に高揚するように、相手が実力者であるほど興奮が高まる。故に先輩方や実力自慢の同輩たち、欲を言えば先生方や現役のプロ忍者たちが、喜八郎が落とし穴に落としたいと思う標的だった。

忍術学園は忍たま以外にも、医務室に入り浸る曲者や学園長先生を狙う暗殺者など、様々な忍者が行き交う珍しい場所だ。その近辺ほど期待値が高まるのは道理である。……不運大魔王こと伊作先輩だけは、落としたい対象に入らないのだが。

最上級生になってなお伊作先輩は、喜八郎が手慰みに作るただの穴たちにさえお約束のように落ちまくっている。だが落ちる割に、設計的配慮もあるとはいえ擦り傷一つ負わないこともざらで、脱出に難儀し穴に長居した話も滅多に聞かない。故に最近は『実は保健委員会委員長として危険を潰すべくわざと落ちて回っているのではないか』という疑念を抱きつつあった。いずれにせよ馴染みの犠牲者であるため、伊作先輩だけは下級生並みに嬉しくないのだった。

……不満のあまりつい伊作先輩のことを長々と語ってしまった。話を元の筋、つまり『何故本日わざわざ期待値の低い場所に落とし穴を作るに至ったのか』に戻そう。

まず前提として、喜八郎は元々この場所に目をつけていて、その内穴を掘りに来ようと思っていた。そして本日は委員会活動がなく敷地外へ赴く時間があった。つまり決行するのに都合がよかったのだ。……もちろんそれも、理由の一つに相違ない。だが本日にした最大の理由は、

喜八郎が今日は学園内に居たくない気分になった点にあった。
元々喜八郎は本日遠出するつもりなどなく、いつものように校庭でのんびり落とし穴作りをして過ごすつもりだった。故に放課後になるとすぐに踏子ちゃんを手に校庭へと繰り出した。
だがさほどせぬ内に、塹壕掘りの開始を宣言する体育委員会委員長の大声が耳をつんざいた。咄嗟に耳を塞いで音源の方へと視線を向ける。そこで喜八郎は、他の後輩らと共に嫌々ながら塹壕を掘り始めた己が同室を見つけたのだった。そのすぐ背後に、先の騒音の源であり早くも驚異的速度で塹壕を掘りまくっているいけどん野郎の姿も認められる。

（――今日も体育委員会、あるんだ）

喜八郎は、妙に不愉快な気分になって思わず顔をしかめた。
好き好んで土を掘る人間というだけで一括りにされがちだが、かの先輩は喜八郎からすれば何もかもが真逆で正直苦手な存在だった。そして彼は思考も体力も規格外な脳筋である。故にどれだけ距離を取ろうとも、校庭で穴を掘る以上はどこかで遭遇する可能性が否定できない。いや、鉢合わせするに決まっている。
楽しく穴を掘るに際し、かの先輩や体育委員会に遭遇するなどごめんである。故に喜八郎は即回れ右をして私服に着替え、外出届を貰って敷地外に穴掘りに来たのである。質のいい土に気持ちよく穴を掘れば、毛羽だった気分がよくなるだろうという目算もあった。

満足のいく穴を一つ掘って落とし穴に仕上げた今、喜八郎の気分は期待どおり概ね落ち着いてくれていた。だが学園に戻る気にはまだなれなかった。あと二つ三つ掘れば気が済みそうな予感はあるが、この辺りには気持ちよく穴を掘れそうな場所はもうない。

故に喜八郎は、次なる穴掘りスポットを探して獣道をふらふらと歩き出した。

「オイ、そこのガキ」

地面に目を凝らしながら獣道を進んでいると、不意に不遜な物言いで呼び止められた。後方から聞こえた野太い声音から、発言者の職業は容易に推察される。そこで喜八郎は、十中八九自分のことと理解しながら背後をわざと外して周囲をキョロキョロと見渡した。

「テメェだよ、テメェ！ んで後ろだ、勘の悪いガキめ！」

すると思ったとおり、粗野な声が苛立ちも露わに吼えた。仕方なく背後を振り向けば、大柄で人相の悪い男が三人、獣道を塞ぐように立っている。それぞれの手には刃こぼれした抜き身の刀が握られていた。男たちは喜八郎と視線が合うと、下品なにやにや笑いを浮かべる。

「そうだ、テメェのことだ。ガキのくせになかなか良い衣着てんじゃねェか。命が惜しきゃあ身包み脱いで置いてきなァ！」

最も体格の良い男が、値踏みするような視線を向けて脅しをかけてくる。揃って刃をちらつかせ下卑た笑いを立てた。想定どおり過ぎる展開に、喜八郎は逆に驚きを覚え山賊を眺める。

だがそこでふと喜八郎は、この光景に既視感があることに気がついた。不思議に思い、目の

前の場景を手がかりに記憶を手繰る。結果、今と酷似した状況に陥ったことが過去にもあったことを思い出した。

あれは多分一年ほど前、萌葱（もえぎ）の制服がようやく身に馴染んできた頃のことだった。

その日、滝夜叉丸に腹を立て学園を飛び出した喜八郎は、一人裏裏山へとやって来ていた。何に怒っていたのかは覚えていない。きっと些細なことだっただろう。あの頃の喜八郎には、滝夜叉丸のさまざまな点が鼻について仕方がなかった。

陽が傾き始めた頃、満足のいく穴を一つ掘り終えてようやく、喜八郎の気分は落ち着いた。だが怒り任せに獣道を進み目についた場所を掘っていた喜八郎は、裏山の奥深くにまで入り込んでしまっていた。今すぐ帰路につかねば裏山を出る前に日没を迎え、夕食にも間に合わないだろう。だがまだ幼かった喜八郎は、間に合わない可能性のある夕食よりも穴掘りを優先した。次なる場所を探して、さらに山奥へと足を踏み入れる。

その後直面した事態こそが、今の喜八郎に既視感をもたらした出来事だったのだ。

＊＊＊

「おうそこのチビ！」
「死にたくなかったら身包み脱いで全部置いてきな！」

穴掘りに適した土を探していた喜八郎の前に口々にそう喚きつつ立ち塞がったのは、小汚い身なりの二人組だった。どちらもひょろ長い男で、一方は鎌、もう一方は斧を手にしている。みすぼらしい印象を受けるが、言動からも山賊と呼ばれる無法者に間違いなさそうだった。

山賊に遭遇した経験がないことはなかったが、刃物を持った大人の男二人に対し、喜八郎はまだ幼い上に一人きりである。多勢に無勢もいいところだ。

生き延びるのを本分とする忍びとしても、この場を安全に切り抜けるのが最優先であることは分かる。だがまだ経験に乏しい喜八郎には何が最善策なのかが分からなかった。

侮るつもりはないが山賊たちは単純そうに見え、要求に従いさえすれば宣言していたとおり命の危険はないように思える。だが確信できる根拠はない。また確信に足る情報を引き出す、あるいは自身に有利な状況を作る話術もなかった。それ以前に、頭では分かっていても無法者たちに大人しく従う屈辱を割り切れるほど大人でもなかった。

「どうした、早くしろ。きれいな顔のボーズでも容赦しねえぞ？」

従うことへの抵抗もあって逡巡（しゅんじゅん）していると、重ねて脅しをかけられた。同時に男たちがじりじりと距離を詰め始める。取りあえず詰められた分を取り戻すように後退るが、喜八郎の思考は焦りでもつれ、同じところをぐるぐると巡り出し始めていた。

その時だった。
何かが風を切って飛ぶ音が、喜八郎の耳に微かに届いた。その音は次第に大きく、はっきりと聞こえるようになっていく。
（この音を、僕は、知ってる――……）
「――伏せろ、喜八郎！」
瞬間、嫌になるほど聞かされ続け、結果不本意ながら耳に馴染んでしまった声が、場の空気を震わせた。反射的に身を伏せると、頭のすぐ上を何かが空を切って駆け抜けていく。
「うわッ!? なんだ!?!」
喜八郎の頭上を通過した飛来物は、驚く山賊のすぐ脇を通り天高く舞い上がった。手入れの行き届いた刃が、沈みつつある陽の光を弾いて鈍く光る。
円環状のその物体は中空で弧を描くように滑空し道端へと飛び去っていく。行方を目だけで追うと、斜め前辺りに生えた薮の中に人影が一つ。顔は影になってしまっているが、その人物が身につけているのが萌葱の忍装束であることは分かった。そして飛来物は、天を差したその人物の指へと予定調和のように舞い戻る。当然のように受け止めたその指を支点にくるくると回り続けるそれは、喜八郎の小うるさい同室が熱心に練習している武器――戦輪だった。
そう、道端に突如現れたのは他の誰でもない、喜八郎の同室である滝夜叉丸だったのだ。